



2026年度 須磨学園中学校入学試験

国 語

第 1 回

(注 意)

解答用紙は、この問題冊子の中央にはさんであります。まず、解答用紙を取り出して、  
受験番号シールを貼り、受験番号と名前を記入しなさい。

1. すべての問題を解答しなさい。
2. 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
3. 解答は、1 行の枠内に 2 行以上書いてはいけません。また、字数制限のある問題については、記号や句読点も 1 字と数えることとします。
4. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

須磨学園中学校

※この冊子は再生紙・ベジタブルインキを使用しています。

【 1】 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

「本文」

「<sup>A</sup>利便性の高いシステムは、わたしたちを本当に幸せなものとしているのか」、<sup>a</sup>こうしたギロン<sup>a</sup>がいま各所で同時多発的になされています。

利便性、効率性、経済的合理性など、これらを懸命<sup>けんめい</sup>に追求してきたはずなのに、なんだか違う……。こんな便利なモノだけに囲まれて、本当に幸せなんでしょうか。たしかに便利なのですが、そこで自分が生き生きとした感じがしないのです。

かつてイヴァン・イリイチは、『コンヴィヴィアリティのための道具』<sup>注1</sup>（ちくま学芸文庫、二〇一五年）の中で、二つの分水嶺<sup>ぶんすいりょう</sup>（ちくま学芸文庫、二〇一五年）の中で、二つの分水嶺<sup>ぶんすいりょう</sup>の存在を指摘<sup>してき</sup>しました。わたしたちはさまざまな道具を手に入れることで自らの能力<sup>b</sup>をカクチョウ<sup>b</sup>ウさせることができた（Ⅱ第一の分水嶺<sup>c</sup>）わけですが、シダイ<sup>c</sup>に利便性の高い道具やシステムに頼<sup>たよ</sup>るなかで、いつの間にか隷属<sup>れいぞく</sup>していた（Ⅱ第二の分水嶺<sup>c</sup>）というのです。

たとえば、自動運転システムはどうでしょう。たしかに便利なものであり、高齢者<sup>こうれいしや</sup>や障がいのある方々<sup>注2</sup>にとつて福音<sup>ふく音</sup>となるものです。交通事故<sup>d</sup>のテイゲン<sup>d</sup>や渋滞<sup>じゅうたい</sup>の緩和<sup>かんわ</sup>につながることも期待されています。ところが、「勝手に運転してくれるクルマって、いかも……」などと油断していると、「なにも手が出せず、ただやってもらうだけ」の状況<sup>じょうきよう</sup>になってしまうこともあります。少し冷静に考えるなら、ただの「荷物の一つ」として運ばれるような気分にもなるのです。

あるいは、「<sup>Ⅰ</sup>ごはんを食べさせてくれるロボットがあったらどうか」と、そうした研究開発も進められています。たとえば手や腕<sup>うで</sup>に痛みやしびれがあったりして、お箸<sup>はし</sup>やスプーンなどが持ちにくいなど不自由がある人には、大切な支援機器<sup>しえんき</sup>となることです。ただ、すべてをロボットに委ねてしまうのも考えものです。なにも手を出すことなく、ただ口を開けて待っているだけ……。どこかロボットの采配<sup>さいはい</sup>で生きながらえているような気持ちになっ  
てしまわないでしょうか。いったい、どこでボタンの掛け違えを  
してしまったのでしょうか。

至れり尽くせり……。相手のために、すべてのことをやってあげる。この「相手のために！」と尽くしすぎる行動は、むしろ相手の主体性や「人らしさ」を奪<sup>うば</sup>ってしまう側面もあるのです。そうしたこともあり、モノやシステムとのかかわりでも、これまでの「利便性<sup>いっぺんせう</sup>」<sup>e</sup>辺倒<sup>へんとう</sup>のカチカン<sup>e</sup>を見直してみようというわけ  
です。

その一つのヒントは、「コンヴィヴィアリティ（conviviality）」という言葉にありそうです。もともと「和気あいあいと食事を楽

しむような雰囲気<sup>ふんいき</sup>」を指す言葉で、「ともに（con）・生き生きとした（vital）」の意から、「自立共生的なかかわり」、「共<sup>き</sup>倫<sup>りん</sup>的<sup>てき</sup>なかかわり」と訳されることもあります。先に「<sup>注3</sup>注文をまちがえる料理店」のところで<sup>f</sup>ノベ<sup>f</sup>たように、「お互<sup>たが</sup>いの立場<sup>たちば</sup>を越<sup>こ</sup>えて助けあい、みんなが一つになって、その場<sup>ば</sup>をモリ上<sup>あ</sup>げている」。そんな雰囲気かと思われま<sup>す</sup>。そうした中でお互<sup>たが</sup>いは、「自らの能力が十分に生かされ、そこで生き生きした幸せな状態」を指す、ウェルビーイング（well-being）をアップさせているようなのです。先のハサミ<sup>注4</sup>の場合は、どうでしょうか。わたしたちの柔<sup>やわ</sup>らかな手の中にあつて、ハサミに新たな機能や役割が立ち現れます。と同時に、それを巧<sup>たく</sup>みに使いこなす者として、使い手であるわたしたちも新たにカチづけられます。ハサミが潜在<sup>せんざい</sup>していた能力を引き出してくれているのです。

あるいは、初めてクルマのハンドルを握<sup>にぎ</sup>り、アクセルを踏<sup>ふ</sup>みこんだときに、とてもドキドキ、ワクワクしました。すぐに自在に操<sup>あやつ</sup>れるようになり、ロングドライブの後には、ちょっとした達成感や有能感も覚えたことでしょう。クルマはわたしたちの身体の一部となつて、その機能<sup>B</sup>をカクチョウ<sup>B</sup>ウしてくれます。これはとても幸せなことであり、また街や道路と一体となつた感覚はとても心地よいものでした。

ハサミとのかかわり、そしてクルマの運転。先ほどのイリイチの指摘に従えば、これらは「コンヴィヴィアリティのための道具」の一つであり、わたしたちのウェルビーイングをアップさせるのに、一役買っていたわけです。

<sup>注5</sup>ライアンとデシラの自己決定理論によれば、ウェルビーイングを支える構成要素として、「自律性」、「有能感」そして「関係性」の三つを挙げています。クルマの運転に当てはめるなら、

I	（Ⅱ自律性）、	「	II	……」
という有能感や達成感、そして				
III				
や街と一体となつた感覚（Ⅱ関係性）				

だが、わたしたちのウェルビーイングをアップさせているようなのです。

（岡田美智男『〈弱いロボット〉から考える』）

注1 イヴァン・イリイチ：オーストリアの哲学者<sup>てつがくしや</sup>。

注2 福音：よろこばしいしらせ。

注3 「注文をまちがえる料理店」：認知症<sup>にんちしよう</sup>の人が注文を聞くシステムのレストラン。本書の前項<sup>ぜんこう</sup>でコンヴィヴィアルなかかわりの例としてあげられている。

注4 ハサミ：本書の前項で、「弱さ」を持つ道具の例としてあげられている。

注5 ライアンとデシ：リチャード・ライアンとエドワード・デシ。どちらもアメリカの心理学者。

一の設問

問一「利便性の高いシステムは、わたしたちを本当に幸せなものとしているのか」(――線部A)とありますが、そのようなギロンが起きるのはなぜですか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 利用者の使いやすさを志向しすぎたシステムのために、利用者はシステムに従うだけの存在になり、自分の意志で考えて行動する機会を失ってしまう可能性があるから。
- 2 利用者の使いやすさを志向しすぎたシステムは便利ではあるが、まだ十分に自らの能力をカクチョウできているとはいえず、ハサミのような原始的な道具に頼らざるを得ないから。
- 3 利用者の使いやすさを志向しすぎたシステムは利用者から生き生きとした実感を奪い、利用者を精神的にも、肉体的にも衰えさせてしまう可能性を持っているから。
- 4 利用者の使いやすさを志向しすぎたシステムに満足すると、それよりも効率性や経済的合理性を高められるシステムがつくりだされる余地をなくしてしまうことになるから。

問二 次の一文を本文中に戻すとき、最も適当な箇所を探し、挿入直後の五文字を抜き出なさい。ただし、段落の最末尾には挿入されないものとします。なお、句読点は一字と数えます。

これまで培った経験や勘も生かせず、システムの独りよがりな行動に一方的に付きあうだけ。

問三 「その機能」(――線部B)とありますが、それはどのような機能ですか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 達成感や有能感を覚える機能
- 2 別の場所に移動する機能
- 3 交通事故や渋滞を少なくする機能
- 4 旅に出る喜びを感じる機能

問四 本文中の空欄Ⅰ、Ⅱ、Ⅲにあてはまる語句として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。なお、同じ番号を複数回使ってはけません。

- 1 クルマとの一体感
- 2 ドキドキ、ワクワクすること
- 3 誰よりも早く走れる
- 4 クルマを自在に操れること
- 5 シタイにうまくなった
- 6 空も飛べるはずだという感覚
- 7 身体機能がカクチョウされた幸福
- 8 不自由がなくなった

問五 「ウェルビーイングをアップさせている」(――線部C)とありますが、次の1～4が本文に書かれる「ウェルビーイングをアップ」させる例として適当であればY、適当でなければNを記しなさい。

- 1 少し遠出をするのに自転車を使う。
- 2 自由研究の宿題をAIの指示のままに行う。
- 3 ミシンを使って、洋服を縫う。
- 4 ベルトコンベアを使い、全自動で製品を作る。

設問は、裏面に続きます。

問六 この文章で筆者は、どのように生きること人間はより幸せになれると考えていますか。一〇〇字以上一二〇字以内で説明しなさい。ただし、本文中でアルファベットが付記されている言葉をそのまま使つてはいけません（句読点も一字と数えます。なお、採点は、どういう書かれ方をしているかについても見ます）。

下書き用（※これは解答用紙ではありません）

120		100		80		60		40		20	

問七 ゴロ線部 a ～ g のカタカナに相当する漢字を楷書で書きなさい。

a	ギロン	b	カクチョウ
c	シダイ	d	テイゲン
e	カチカン	f	ノ（ベ）
g	モ（リ）		

問八 次の「資料」を読み、後の設問に答えなさい。  
「資料」

便利なのか？ 不便なのか？ その境界線が溶けていく中で筆者が注目したいのは、「人は本当は何を欲しがっているのか？」「心に残る体験はどうすればつくることができるか？」という問いでした。

この答えに迫る上で今回ご紹介したいのが、「便利が無条件に好ましいわけではなく、意図する／せざるに関わらず不便な状況がある、あるいは好んで不便を取り入れることによって、かえって喜びが生まれたり、共感できるタネが生まれる」という真理。（中略）

「不便益」という言葉。もしかすると、書籍やテレビ番組他で耳にしたことがあるかもしれません。

具体的にいうと、以下のようなことを指します。

・造花は水をやる必要がなくて楽ちんだが、世話をしないと枯れてしまう生花に愛を注ぐ方が好きだ

・遠足のおやつは「三〇〇円まで」（なぜかいつの時代も）と制限されるからこそ、お菓子コーナーでは気合が入るのであり、その楽しさは今も覚えている

・YouTubeでもアーティストのライブは見られるのに、わざわざ雨ガッパで山奥の夏フェス会場へ足を運び、どろんこずぶ濡れになって見たあの日のステージが忘れられない

いかがでしょうか（ご自身の体験を、ぜひ思い起こしてみ

てください）。

これらの例に共通していえることは、「手間ひま（面倒）や遠回り、苦労、負荷がそこに存在することで、（存在しない場合に比べて）体験そのものが味わい深くなり、印象に残りやすい」ということ。

「ああ～そういうのあるよね、前から」と誰もが、なんとなく共感できるのではないだろうか。（中略）

過剰な便利さに対して、人々が心地よくないと感じたり、どことない不安を抱くという事実は、いわゆる「スマホ疲れ」「SNS疲れ」「デジタルデトックス」といった、二〇〇〇年代初頭から流行してきた言葉を振り返っても分かることです。

このことについて、川上先生の書籍では、「人間は目の前でそのしくみが理解できる道理」物理に根ざした安心を感じるようにできている（目をみて話を聞き、うなずきながらエンピツでメモをとるビジネスパーソンの方が目も合わせずにスマホとタブレットをスワイプしまくるデキる風ビジネスパーソンよりも信頼される）」といったメカニズムが紹介されています。なるほど物理かと、いたく腹に落ちました。

（電通報 二〇二二年二月二十四日）

注 川上先生：川上浩司。「不便益」の提唱者。

設問は、次の用紙に続きます。

問 「本文」と「資料」を読み、その内容として適当なものを、後の選択肢からすべて選び、番号で答えなさい。

1 「資料」にある「不利益」を人に感じさせるものとしては、「本文」の「ハサミ」や従来の「クルマ」のような、全てを機械に委ねるのではなく、人が人の手によって操作するものが該当する。

2 「資料」も「本文」も人間が今以上に利便性を求めて文明化することについては否定的であり、人間が人間らしく生きるためには「デジタルデトックス」や「スマホ離れ」をする必要があるとする。

3 「資料」によると、人間は「造花」や「You Tube」の方が、「自動運転システム」や「ごはんを食べさせてくれるロボット」よりも物理的に身近であるため、心に残りやすい。

4 「資料」によると、「注文を間違える料理店」のように、意識的に不便な状況をつくりだしたものが、「ハサミ」などのような、自然に不便な状況を持つものよりも心に残りやすい。

5 「資料」も「本文」も、不便な状況や面倒くささがあることを肯定的に捉えるが、「本文」ではそれが人間らしい生活のために必要だとするのに対し、「資料」では心に残る体験のために必要だとしている。

二

次の文章は、早見和真『アルプス席の母』の一節です。  
菜々子には、全国高等学校野球選手権大会（甲子園）の出場  
を目指す、高校三年生の息子・航太郎がいる。航太郎は肘の  
怪我による挫折をへて、控え選手として夏の地方大会に出場  
する。以下の文章は、普段は寮で生活する航太郎が、背番号  
をもらえた報告のために菜々子のもとに帰って来た場面で  
す。これを読んで、後の設問に答えなさい。

その一週間後の日曜日、航太郎が家に戻ってきた。夜になると  
言っていたのに、連日続く豪雨のせいで練習が早く終わったらし  
く、夕方には帰ってきた。

「ホンマ。少しでも追い込みたいこのタ□□□グで雨ばかりな  
のはキツイで。他の学校も条件は一緒やろうけど、いまはもっと  
練習したいのに」

独り言のように不満を漏らしながら、航太郎はまっすぐ仏壇に  
向かった。もうその身体の厚さに面食らうことはない。見慣れた  
ということもあるだろうけれど、一番大きかった頃に比べると少  
し肉が落ちた気がする。

<sup>A</sup>「ちゃんとご飯食べてるの？」

「うん。食べとるで。ずっとおいしくなと思ってた寮のメシや  
けど、あと何回も食べられないと思うと名残惜しい」

「そうか。二年も食べさせてもらったんだもんね」

「そやな」

航太郎は仏壇の前に正座すると、きちんとロウソクから線香に  
火をつけ、その炎を手で消してから、おりんを鳴らした。

ずいぶん長い時間、航太郎は手を合わせていた。遺影の健夫は  
いつもと同じ笑みを浮かべている。亡き父に何を語りかけている  
のだろう。もちろんその声は聞こえないが、きつといい報告をし  
ているに違いない。

ようやく合掌を解くと、航太郎はどこか照れくさそうに菜々子  
の待つダイニングテーブルにやって来た。

「何か飲む？」

「アイスコーヒーある？」

<sup>b</sup>「□□前に」

そんなイヤミを言いながらも、菜々子は言われたまま冷蔵庫の  
コーヒーをグラスに注いで、テーブルに置いた。

航太郎はそれを一息に飲み干した。

「早くない？ もう一杯？」

「ううん、大丈夫。自分でやる」

「いいよ。そんなのべつに」

「いや、それよりさ、お母さん——」

そう切りだし、航太郎が次の言葉を発するまでに、たしかにわ

ずかな間があった。

<sup>B</sup>「俺の野球はここまでやから」

「どういう意味？ 高校野球がってこと？」

「ちゃうわ。野球そのものが」

「なんで？ 大学でも続けるんじゃないかったの？」

最後にそれを聞いたのはいつだったろうか。そんなに前のこと  
じゃない。少なくとも高校に入ってからのことだ。この先も野球  
は続けるものと頭から信じていた。

航太郎はうつつすらと目を細めた。

「もうええやろ。ここまでやったら充分や。中途半端に続けるの  
は性に合わん。高校野球は最後までやり切ったんやし、お父さん  
も認めてくれるんちゃう？」

そう口にして、航太郎は健夫の写真に目を向ける。ヘラヘラと  
笑ってはいるけれど、意志を感じさせる声だった。ああ、そう  
か。<sup>D</sup>そのことを先に健夫に報告したのか。そんなことをボンヤリ  
と思う。

べつに辞めたいなら辞めればいい。それを止めようとは思わな  
い。しかし、だとすれば聞いておかなければならないことがある。

「でも、だったらどうするのよ。あんたから野球を取ったら何も  
なくなるじゃない」

航太郎は呆れたように肩をすくめた。

「おかんがそんなこと言うのはあかんやろ。でも、まあ大丈夫  
や。おかんを楽させるために就職するとかは言わんから。どうい  
う形になるかは知らんけど、大学には行こうと思うとる。俺、高  
校野球の監督になりたいんや。自分みたいに野球でいい思いも、  
しんどい思いもした人間が指導者になるのはええと思うんよな。  
エリートのまま監督になった人間は最悪や。だから、そやな。野  
球を辞めるっていうか、本格的な野球をついていう感じか。ひとま  
ず封印や」

「それ、佐伯さんのこと言ってるの？」

何か言葉を発さなければ、航太郎の勢いに飲み込まれてしま  
いそうだった。航太郎は茶化すように口をすぼめる。

「たしかにあの人もその一人かな」

「でも、佐伯さん変わったよ。少なくとも私は最近の監督さん接  
しやすい」

「それは同感」

「それでもあの人のやり方を否定する？」

<sup>E</sup>「それは、するかな」

「どうして？」

「そういうものだと思うから」

問題文は、裏面に続きます。

航太郎はきっぱりと言いつつ。意味がわからず、小首をかしげた菜々子の目をじっと見つめて、航太郎はさらに思ってもみないことを口にした。

「俺、もしいまお父さんが生きていたとしても、わりと反発してたと思うんだよね。好きとか、嫌いとかいうことじゃなく、なんていうか、父親むすこって息子にとつてそういうものだっていう気がする。注3連とか大成とかの親父おやじさんとかかわり方を見ててそう思ったことがある。少しだけうらやましかった。だけど、俺には俺でそういう仮想敵みたいな人はいるよなって、あるとき思った」

「それが佐伯監督？」

「うん。あなたは俺の父親代わりですみたいなことを言うつもりは全然ないし、気持ち悪いから絶対に本人には伝えないけど。まあ、感謝はしてる。だからこそ、あの人のやり方を否定しなきゃいけないって思ってる」

菜々子の胸の中のわずかなしこりが消えた気がした。

「ねえ、航太郎。あんた、希望学園に入つて良かったと思ってる？」

「それは間違いない」

「そうか。じゃあ、いよいよ甲子園行かなきゃね」

「だから行くって言っとるやろ」

「あ、あともう一個」

「なんやねん」

「あんた、さっきから、おかん、って言いすぎ。私ホントにそれイヤなの。今度言ったらマジで縁切えんるから」

航太郎はキョトンとした表情を浮かべ、すぐに「なんだよ、どさくさに紛まぎれてイケると思ったのに。ってか、最近お母さんの大阪弁さかべんが止まらないって陽人注4のおかんから聞いたんやけどな。ちゃうの？」などの□□（？）つた。

菜々子は笑うのをグツと堪こらえて、窓の方に目を向けた。あいかわらず雨が降り続き、雷鳴らいめいまで轟とどろいている。

それでも、今年は梅雨つゆ明けが早いと聞いている。この雨の季節をくぐり抜けたら、高校野球最後の季節がやって来る。

F「がんばりなさい。応援おうえんしてるから」

そんな母の言葉の意味を、息子のはき違えたらしい。

「そんな大層なことでもないやろう。たかが、おかん、って呼び方くらい。大げさやな」

暑い夏がやって来る。

注1 健夫：航太郎の亡父。航太郎が私立の強豪野球部を意識する一つのきっかけとなった。

注2 佐伯さん：航太郎の所属する野球部の監督。

注3 連とか大成：どちらも、航太郎の野球部の仲間。

注4 陽人：航太郎の野球部の仲間。

二の設問

問一 ~~~~~線部a~cの空欄に入る文字として最も適当なものを、aはカタカナ、bは漢字、cはひらがなで答えなさい。  
なお、空欄一つにつき、一文字が入るものとします。

- a タ□□□グ                      b 一□前  
c の□□った

問二 「ちゃんとご飯食べてるの？」（——線部A）とありますが、ここで菜々子はどうな気持ちでいるのですか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 おいしくない寮のごはんでは十分な栄養が摂れないだろうから、自分の手料理を食べさせたい気持ち。
- 2 連日の豪雨で練習ができないストレスから食事が摂れていない息子を、哀れに思う気持ち。
- 3 野球をやめようと思っている息子に対して、間接的な話題から励まそうとする気持ち。
- 4 一時期に比べて痩せてしまったように見える息子が、健康的な生活ができているのかを心配する気持ち。

問三 「俺の野球はここまでやから」（——線部B）とありますが、この言葉には航太郎のどのような思いがこめられていますか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 甲子園出場やプロを目指して練習する野球は高校でやめ、挫折した経験を指導に活かせる野球の監督になることを目指し、大学に進学したいという思い。
- 2 部活でレギュラーを取るほどの才能は備わっておらず、それを補うためにどれほどの努力をしてもどうにもならなかったことを悔しく感じる思い。
- 3 プロ野球選手になってほしいと思っていた父親や佐伯監督に反発するため、プロを目指しての本格的な野球は高校でやめようという思い。
- 4 女手一つで育ててくれた母親を楽にするために、プロ野球選手を目指すのをやめて大学に進学し、安定した職業に就こうという思い。

問四 「うつすらと目を細めた」（——線部C）とありますが、このときの航太郎はどのような気持ちでいるのですか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 高校での部活動を思い出し、道半ばで野球を辞めることとなり、父の目の前で活躍する姿を見せられなかった自分を甲斐なく思っている。
- 2 亡くなった父親の、高校野球で活躍し、甲子園に出場してほしいという期待に応えられたことを確信し、誇らしく思っている。
- 3 野球をやめる決心をしたが、自分の進路がぼんやりとしていることを、父が生きていればどう思っているだろうかということに不安を抱いている。
- 4 希望学園での三年間の部活動に全力を尽くしたと自負しており、そのことを亡くなった父親も喜んでくれるだろうと思っている。

設問は、裏面に続きます。



**問五** 次の文章は、「そのことを先に健夫に報告したのか」（――線部D）という記述について説明したものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「そのことを先に健夫に報告したのか」の「か」は、「気づき」を表す言葉であり、ここでは、航太郎が健夫に報告していたのは、（――I――）ということではないのだ、と葉々子が気付いたことを意味している。寮から帰って来た航太郎が、「まったく仏壇に向か」い、「仏壇の前に正座すると、きちんと」した作法で、「ずいぶん長い時間」「手を合わせていた」という表現と、――線部Dから、航太郎の（――II――）という気持ちを読み取れる。

i 空欄（――I――）に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 甲子園への出場が決まった
- 2 野球を辞める決心をした
- 3 卒業と同時に退寮が決まった
- 4 最後の大会の背番号がもらえた

ii 空欄（――II――）にあてはまる内容を、六〇字以内で答えなさい。

下書き用（※これは解答用紙ではありません）

60		40		20	

**問六** 「それは、するかな」（――線部E）とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 航太郎から見た佐伯監督は、エリートのまま監督になった人間の代表的な存在で、自分が理想とする監督像とはかけ離れた人間性を持っているから、最近の監督の接しやすさや考え方にかかわらず、監督のやり方を否定すること。
- 2 佐伯監督の指示をきいて三年間の活動をしたのに、結局はレギュラーを奪取できなくて、監督の指導力に疑問を抱いたため、最近の監督の指導方法が自分にあつたものにかわったけれども、監督のやり方を否定すること。
- 3 父親を亡くした航太郎にとって佐伯監督は、父親のような側面を持つ存在であるから、友人がそれぞれの父親に反発し越えようとするように、最近の監督の指導方針や指導内容にかかわらず、監督のやり方を否定すること。
- 4 航太郎は佐伯監督に感謝はしているが、時に父親のような顔をする監督の態度には不快な感情を抱いているため、最近の監督が航太郎の母親と打ち解けたことにかかわらず、監督のやり方を否定すること。

設問は、次の用紙に続きます。

問七 「がんばりなさい。応援してるから」（——線部F）とありますが、このときの菜々子の気持ちの説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 航太郎が、自分のことを「お母さん」と呼ぶのに恥ずかしさを覚える年齢になったのだと微笑ましく感じ、怒ったふりをしながら、航太郎が「おかん」と呼ぶのを茶化そうと思う気持ち。
- 2 航太郎が、父親がいない中でも立派に成長し、自分なりに進路を考えていることに安心し、その進路の実現と、苦労しながらも希望学園野球部での活動を前向きに全うしての甲子園出場を後押ししたいと思う気持ち。
- 3 航太郎が、希望学園での部活の集大成として、甲子園に出場するだけでなく、レギュラーを獲得してほしいと思い、時には理不尽だと感じるほどに厳しい監督のもとでの指導を乗り越えられるように祈る気持ち。
- 4 航太郎の自分に対する言葉遣いを直すことで人としての成長を促し、より一層真剣に野球部の活動ができるような精神性を鍛え、なんとしても甲子園に出場させてあげたいと思う気持ち。

問八 本文の表現や内容の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 本文は菜々子の一人称で語られているため、菜々子の心情はすべて明確に描かれている。
- 2 菜々子にも航太郎にも大阪弁を使わせることで、家庭内のリラックスした雰囲気描かれている。
- 3 航太郎の佐伯監督に対する、「あの人」という呼び方は、監督に対する反発心が表れている。
- 4 「イヤミ」、「縁切るから」などの言葉に、思春期の航太郎を扱いかねる菜々子の心情が表れている。
- 5 「いや、それよりさ、お母さん」や「たしかにあの人もその一人かな」など、航太郎が真剣に本心話を話すときには標準語が使われている。



↓ここにシールを貼ってください↓

受 験 番 号			

名 前	
-----	--



2026年度 須磨学園中学校 第1回入学試験解答用紙 国語

※											
問六											
120		100		80		60		40		20	

※	
問五	
3	1
4	2

※
問四
I
II
III

※
問三

※
問一
問二

(※の欄には、何も記入してはいけません)

一

二

※
問八

※
問六
問七

※							
問五							
ii							i
60		40		20			

※
問二
問三
問四

※
問一
a
b
c

(※の欄には、何も記入してはいけません)

二

※
問八

※		
問七		
g	d	a
(り)		
	e	b
	f	c
(へ)		



2026SUMAJ0110

※
---

※
---

※
---

